
狩猟塔トーレ・デ・ラ・パラダと君主教育論
—スネイエルスの狩猟画とベラスケスの哲学者の肖像画を中心に—

17世紀のスペイン王フェリペ4世は、マドリッド郊外のパルドの森に位置するトーレ・デ・ラ・パラダと呼ばれた狩猟休憩塔の大規模な改築をおこない、ルーベンスやその工房、そしてベラスケスらに内部装飾を命じた。これまで、神話画や肖像画、狩猟画、動物画など合計173点におよぶ絵画によって構成された狩猟塔の装飾プログラムについては、定説と呼べるものは現れていない。近年はメナ・マルケスが、この館の装飾プログラムは、フェリペ4世の息子が次期国王のバルタサール・カルロス王子を、優れた君主として教育することを目的として構想されたものであったという説を主張しているが、個々の絵画に対する詳細な分析には及んでいない。

本発表では、「王のギャラリー (Galería del rey)」という別名が付けられ、館の中で中核的な役割を担っていたとされる上階第七の間の狩猟画のうち、ピーテル・スネイエルス作の《猪を殺すフェリペ4世》、《鹿を撃つフェリペ4世》と、第八の間のベラスケス作《イソップ》、《メニッポス》を分析する。そしてこれらの絵画が、当時の君主教育論における一理念を反映していることを論証する。

王が猪や鹿を狩る場面を描いたスネイエルス作品については、先行する多くの狩猟画に比べて、きわめて静謐な、狩猟につきものの荒々しさが抑制された特異な表現であることに着目する。本来、狩猟は軍務の予行演習と考えられており、カルロス5世の狩猟場面を描いたルーカス・クラナハ(父)の作品等では、狩人の猛々しさが強調されていた。スネイエルス作品における高貴で知的な狩人としてのフェリペ4世の姿勢は、狩猟塔の改築とほぼ同時期に出版された、王の勢子頭ファン・マテオスの『狩猟の起源と威厳 (*Origen y dignidad de la caza*)』(1634年)で讃えられているフェリペ4世の狩猟態度と、きわめて類似していることを示したい。同書では、王の活力や気力がしばしば賞賛されているが、その「活力 (brio)」は猛々しいものではなく、あくまで「軽やかさと技術的な巧みさ」をともなったものとして評価されている。ファン・ルイス・ビーベスの著作をはじめとする16、17世紀の君主教育論において、「戦士としての君主から、賢者としての君主へ」という転換が生じていたことを考えあわせると、スネイエルスの二作品にみられる、激しい戦闘場面の描写をあえて避け、知的な狩人として表された王の姿は、君主教育論におけるこうした変化と相通じている。

一方、ベラスケスの描いた哲学者の肖像、《メニッポス》と《イソップ》に具現化されているような、書物の中の知識を追い求めるのではなく、自らの目や手を頼りに学びとる生きた学識を重視する態度もまた、マテオスの『狩猟の起源と威厳』において宣言される「経験に根ざした知識」の称揚と、深く結びついていることを指摘する。

以上の論点から、狩猟塔の内部装飾に君主教育の理念が反映されていた可能性を、具体的に提示したい。